

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32428

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K19457

研究課題名（和文）通いの場へ支援するリハ職が習得すべきコンピテンシー尺度の開発

研究課題名（英文）Development of competency scale to be acquired by rehabilitation therapist who support for in a Community-Based Salon.

研究代表者

中村 睦美（NAKAMURA, MUTSUMI）

東都大学・幕張ヒューマンケア学部・准教授

研究者番号：50850632

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：住民主体の通いの場へ支援するリハ職が習得すべきコンピテンシー尺度を作成するために、第1研究として、質的帰納的研究デザインを用いコンピテンシー習得プロセスを明らかにした。次に、第1研究の結果をもとにコンピテンシー尺度案を作成し、通いの場の支援に携わっているリハビリテーション専門職を対象とした無記名自記式アンケート調査を実施した。有効回答607名のデータについて探索的因子分析を実施した結果、コンピテンシー尺度は20項目からなる3因子構造であることが推測された。また、本尺度は良好な構成概念妥当性を有しており、十分な信頼性・妥当性を有していることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢者の介護予防を推進するために住民主体の通いの場へ支援するリハビリテーション専門職が習得すべきコンピテンシーとして、支援者としての姿勢と知識、調停能力や臨床的技術が求められることが示された。本研究で作成したコンピテンシー尺度は、支援能力を評価する尺度として用いるとともに、リハ職が目指すべき方向性やその方向に進むべき指針として活用することが期待される。また、本尺度の各項目は、支援における具体的な方策を含む実践例となることが考えられる。本研究の結果は、介護予防事業におけるリハ職を活かした効果的な取り組みを促進させるために有用であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In order to develop a competency scale for rehabilitation professionals who support community gathering, we first clarified the competency acquisition process using a qualitative inductive research design. Next, a draft competency scale was developed, and a self-administered, unscored questionnaire survey was administered to rehabilitation professionals involved in the support of community gathering. An exploratory factor analysis was conducted on the data from 607 valid responses, and it was inferred that the competency scale had a three-factor structure consisting of 20 items. In addition, the scale had good construct validity, indicating that it had sufficient reliability and validity.

研究分野：予防理学療法学

キーワード：介護予防 コンピテンシー尺度 リハビリテーション専門職 通いの場

1. 研究開始当初の背景

2013年に介護保険制度に「介護予防と日常生活総合事業（総合事業）」が設置され、新しい介護予防の考え方が示された。新しい介護予防では、高齢者が主体的に運営する定期的に開かれる健康活動の場や機会である「住民主体の通いの場（通いの場）」を全国に展開することが期待されている。また、一般介護予防事業に「地域リハビリテーション活動支援事業」が設置されたことにより、リハビリテーション専門職（リハ職）の通いの場への関わりが増加した¹⁾。しかし、リハ職の関わりや内容に地域間の格差が大きいことが問題として指摘されており²⁾、厚生労働省は、一般介護予防事業等に今後求められる機能を実現するためには、専門職の効果的・効率的な関与の具体的な方策が必要であるとしている³⁾。しかし、リハ職による通いの場へ支援についての研究報告は極めて少なく、支援能力を評価する尺度はない。そこで、支援の内容や目指すべき方向性を明らかにするために、リハ職による通いの場への支援におけるコンピテンシー（Competency）尺度を作成する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、住民主体の通いの場へ支援するリハ職が習得すべきコンピテンシー尺度を作成することである。

1) 第1研究では、質的帰納的研究デザインを用い、リハ職による住民主体の通いの場支援におけるコンピテンシー習得プロセスを明らかにすることを目的とした。

2) 第2研究では、コンピテンシー尺度案についてアンケート調査を実施し、得られたデータについて探索的因子分析を実施し、コンピテンシー尺度を作成することを目的とした。

3. 研究の方法

1) 第1研究では、質的帰納的研究デザインを用いた。対象者は、総合事業において住民主体の通いの場への支援を2年以上行っている実践経験の豊富なリハビリテーション専門職とした。データ収集のためのインタビューは、通いの場におけるリハ職のコンピテンシーとは何であるか、経験豊富なリハ職は、その行動特性をどのように活かし成果へつなげているのかをリサーチクエスションとして、インタビュー・ガイドに沿って実施した。質問は半構造的面接により、質問以外は対象者に自由に語ってもらえるよう配慮した。インタビューは、オンライン上で個別に行い、1回60分程度とした。データの分析は、人間の行動や他者との社会的相互作用の説明や予測に有効であり、現象の動きやプロセスを分析するのに有効な方法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）⁴⁻⁵⁾を用いた。分析焦点者を「グループ支援経験のあるリハビリテーション専門職」、分析テーマを「リハ職による通いの場支援におけるコンピテンシー習得プロセス」とした。インタビューの逐語録から得られたデータを分析テーマと分析焦点者に照らして、データの関連箇所を具体的にバリエーションとして記入した。ひとつの調査が終わるごとに、最初のバリエーションと比較し、類似性と対極性の観点から継続的比較をした。具体例にある内容の解釈を定義とし、その要約を概念名として記入した。複数の概念を表現できるものは、サブカテゴリ、類似した性質のサブカテゴリを結合し、説明可能なカテゴリを生成した。全体の関係を文章化したストーリーライン、結果図としてまとめた。本研究では、分析過程および分析結果について、M-GTAの研究方法に精通した医療保健専門の研究者と実践者の2名から指導を受け、妥当性の確保に努めた。

2) 第2研究における対象者は、介護予防事業として「通いの場」の支援に携わっているリハ職とした。十分なサンプルサイズを確保するために、全国で「地域リハビリテーション活動支援事業」を実施している病院や介護保険関連施設、都道府県から地域リハビリテーション広域支援センターに指定されている施設をインターネットで検索し、440施設を抽出した。抽出した施設のリハビリテーション科責任者宛てに調査票を郵送し、「通いの場」の支援に携わっているリハ職（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士）に回答を求めた。調査内容は対象者の基本属性、通いの場の支援について「通いの場へ支援するリハ職が習得すべきコンピテンシー項目案」とし、無記名自記式アンケート調査を実施した。「通いの場へ支援するリハ職が習得すべきコンピテンシー項目案」については、第1研究において抽出したキーワードから作成した暫定版尺度50項目とした。なお、暫定版尺度の項目は通いの場への支援経験のある理学療法士と作業療法士6名によるプレテストを実施し、文章の平易さと妥当性を再確認して作成した。回答者には、「あなたが通いの場へ支援する際に実施しているか、6件法（全くあてはまらない～大いにあてはまる）で回答を求めた。取得したデータについて、まず天井効果と床効果の有無について確認した。次に、Item-Total (I-T) 相関分析を行い、各項目と合計得点の相関係数を確認後、尺度の因子構造を検討するために探索的因子分析を実施した。つづいて、得られた因子構造について、分散構造分析を用いてモデル適合度を確認し、作成したモデルについての構成概念妥当性を検証した。モデルの適合度は、GFI (Goodness of Fit Index), AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index), CFI (Comparative Fit Index), および RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) によって検討した⁶⁾。尺度の信頼性については、総得点と因子ごとの得点に対

象に Cronbach ' s 係数を算出し , 内的整合性を検証した。

4 . 研究成果

1) 第 1 研究における対象者は 10 名 (理学療法士 9 名 / 作業療法士 1 名 , 男性 8 名 / 女性 2 名) であった。臨床経験年数は平均 (標準偏差) 17.7 (7.0) 年 , 通いの場支援経験年数は 4.8 (1.7) 年 , インタビュー時間は 63.3 (9.2) 分であった。通いの場におけるリハ職のコンピテンシーと支援プロセスとして , 38 概念 , 15 サブカテゴリが生成され , そのうち次の 6 つのカテゴリ【支援への不安】 , 【支援への準備をする】 , 【ラポールを形成する】 , 【現場を知る】 , 【効果的な支援の実行】 , 【支援内容を活用する】 (図 1) を見出した。以下、カテゴリを【 】、サブカテゴリをで表記する。

ストーリーラインは、住民主体の通いの場におけるリハ職のコンピテンシーと支援プロセスとして【支援への不安】を解消するために、事業への参加体制を整える、事業のコンセプトを理解する、知識をつけるなどの【支援への準備をする】ことが必要である。また、心のもった支援、関係性を築くといった【ラポールを形成する】ことに加えて【現場を知る】ことで、住民の主体性を引き出す、専門的な支援・助言を行う、グループ活動を調停するなどの【効果的な支援の実行】が可能となる。また、他機関と連携する、事業の振り返り、経験を活かすなど【支援内容を活用する】ことの必要性が示唆された。

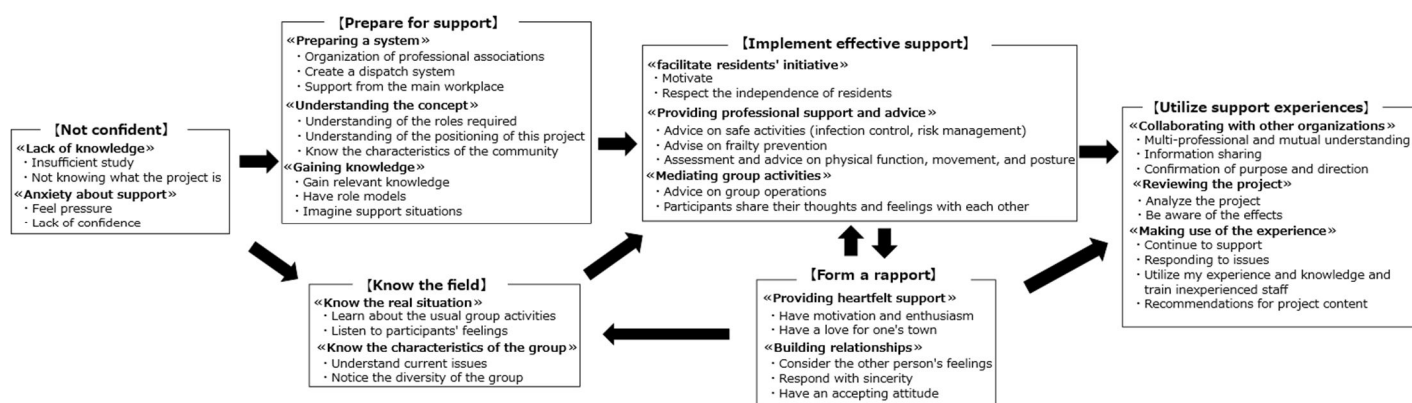


図 1 リハ職による通いの場支援におけるコンピテンシー習得プロセス

3) 第 2 研究において、調査対象となった 440 施設のうち 260 施設より回答 (回答率 59.1%) があり、回答のあった施設に所属する 609 名 男性 425 名 (70.0%) , 女性 180 名 (29.6%) のデータを取得した。平均 (標準偏差) 年齢は 39.0 (8.3) 歳であり、職種は理学療法士 417 名 , 作業療法士 157 名 , 言語聴覚士 28 名であった。資格取得からの経験年数は 15.0 (4.4) 年 , 通いの場の支援経験年数は 8.0 (3.8) 年であった。有効回答 607 名のうち、50 項目への回答に欠損のある 10 名のデータを削除し 597 名のデータで解析を行った。調査票の 50 項目のうち、天井項目を認めた 5 項目と強い項目間相関を認めた 2 項目を除く 43 項目を分析対象とし、探索的因子分析 (一般化された最小 2 乗法 , バリマックス回転) を実施した。共通性について因子負荷量の低い項目と複数の因子に高い負荷量を示した項目、強い相関を認めた項目を除外して分析を繰り返した。最終的に 20 項目からなる 3 因子構造であることが推測された (表 1) 。各因子の解釈として、第 1 因子は 11 項目であり、事前準備と知識、態度に関する項目が高く負荷していることから【支援者としての姿勢と知識】と命名した。第 2 因子は 7 項目であり、グループへ働きかけることに関する項目が高く負荷していることから【集団活動を調停する能力】とした。第 3 因子は 2 項目であり、リハ職としてのアセスメントや治療技術に関する項目が高く負荷していることから【リハ職としての技術と臨床実践能力】と命名した。

因子分析で得られた 3 因子 20 項目のモデルの適合度を検証するため、共分散構造分析を実施した。その結果、GFI = 0.896 , AGFI = 0.869 , CFI = 0.909 , RMSEA = 0.072 であり、許容範囲の適合度が得られた⁶⁾。本尺度の合計得点には正規性が確認され、信頼係数は尺度全体および下位尺度において 0.7 以上であり、内的整合性は保たれていると考えられた。本尺度は信頼性と妥当性を保つ尺度であることが確認され、尺度を活用することで、通いの場へ支援するリハ職の実践能力を評価し、自己の能力や課題に応じた段階的な教育に活用することができると考えられる。また、本尺度の項目を参考にすることで、通いの場へのリハ職による支援の方向性が明らかとなり、支援内容と質について、支援者間の差が少なくなることが期待される。また、本尺度を活用することで、支援者自身の支援内容の確認や振り返りにも有用であると考えられる。

表 1 探索的因子分析の結果

項目	因子		
	第 1 因子 支援者としての姿勢と知識	第 2 因子 集団活動を調停する能力	第 3 因子 リハ職としての技術と臨床実践能力
Q4 介護予防に対する探究心をもち自己研鑽をする	0.568	0.376	0.139
Q5 支援経験豊富なリハ職の支援方法を参考にする	0.45	0.222	0.127
Q7 支援への不安を解消するために事前に調べるなどの準備をする	0.575	0.213	0.117
Q13 参加者との、距離感を意識する	0.698	0.168	0.137
Q14 参加者に自分の考えを押しつけず、意見を引き出す	0.719	0.261	0.118
Q18 参加者に対して先入観をもたない	0.716	0.211	0.134
Q19 参加者のやる気を引き出す	0.739	0.316	0.167
Q23 過度な支援や助言はせず、干渉しすぎない	0.55	0.295	0.177
Q25 参加者へ介護予防に関する情報提供をおこなう	0.51	0.344	0.329
Q29 会場や活動場所の環境におけるリスクマネジメントをする	0.42	0.336	0.329
Q32 病院や介護施設での知識や経験を支援に生かす	0.529	0.141	0.323
Q34 参加者の感想や意見をグループ全体で共有する	0.331	0.587	0.226
Q35 グループ活動の内容や方法、運営上の課題に対して助言する	0.207	0.701	0.299
Q36 グループリーダー（世話人）の相談にのり助言する	0.269	0.647	0.258
Q37 通いの場実際にいき、普段の様子を知る	0.207	0.466	0.052
Q41 他職種・他機関と情報を共有する	0.355	0.562	0.112
Q46 支援経験の浅いリハ職や他のリハ職へ助言や指導をおこなう	0.295	0.619	0.156
Q47 事業主体者へ事業や施策についての課題や、解決策を提案する	0.179	0.813	0.156
Q26 痛みや可動域制限などの機能障害に対して評価や助言する	0.143	0.188	0.815
Q28 参加者の動作や姿勢、歩行について助言する	0.228	0.253	0.72
Cronbach's 係数	全体 0.92	0.893	0.862
		0.799	

<参考文献>

- 1) 厚生労働省ホームページ. 令和元年度 介護予防・日常生活支援総合事業（地域支援事業）の実施状況（令和元年度実施分）に関する調査結果. 介護予防に資する住民主体の通いの場の展開状況. <https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000751039.xlsx>（2024 年 6 月 1 日引用）
- 2) 地域におけるリハビリテーションの活用促進を目指した調査研究. 調査報告書. 平成 30 年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業. 平成 31 年 3 月. 一般社団法人日本リハビリテーション病院・施設協会. https://www.rehakyoh.jp/wp/wp-content/uploads/2019/03/rp_rouken2018_1.pdf（2024 年 6 月 1 日引用）
- 3) 厚生労働省. 老健局老人保健課. 一般介護予防事業等の推進方策に関する検討会取りまとめ. 令和元年 12 月 13 日. <https://www.mhlw.go.jp/content/12300000/000576580.pdf>（2024 年 6 月 1 日引用）
- 4) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践. 質的研究への誘い. 弘文堂, 東京, 2003.
- 5) 木下康仁. グラウンデッド・セオリー・アプローチ. 質的実証研究の誘い. 弘文堂, 東京, 1999.
- 6) Prinsen CAC, Mokkink LB, Bouter LM, Alonso J, Patrick DL, de Vet HCW, et al. COSMIN guideline for systematic reviews of patient-reported outcome measures. Qual Life Res. 2018; 27: 1147-57.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nakamura Mutsumi, Urabe Yoshifumi, Kanauchi Noriko	4. 巻 36
2. 論文標題 Competency acquisition among rehabilitation professionals supporting older residents' community-based activities in Japan: a qualitative study	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Physical Therapy Science	6. 最初と最後の頁 26 ~ 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1589/jpts.36.26	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 中村睦美
2. 発表標題 通いの場におけるリハビリテーション専門職のコンピテンシーと支援プロセス
3. 学会等名 第9回日本予防理学療法学会学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村睦美
2. 発表標題 通いの場へ支援するリハ職が習得すべきコンピテンシー尺度の開発
3. 学会等名 第29回千葉県理学療法学会学術大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Mutsumi Nakamura
2. 発表標題 Support to self motivating groups for care prevention by rehabilitation therapists in Japan.
3. 学会等名 World Physiotherapy Congress2023 in Dubai（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	金内 則子 (Kanauchi Noriko)	東都大学・幕張ヒューマンケア学部理学療法学科	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------